

利尻島杓形森林公園における鳥類標識調査 (予報)

小杉和樹

日本鳥類標識協会会員

(097-04 利尻町杓形字富士見町)

Birds-banding research at Kutsugata forest park, Rishiri Island,
Northern Hokkaido (Preliminary Study)

By

Kazuki KOSUGI

(Fujimi-cho, Kutsugata, Rishiri Is., Hokkaido, 097-04 Japan)

はじめに

利尻島での鳥類標識調査は、三浦二郎氏(苫小牧市在住、日本鳥類標識協会会員)が1990年に新湊ウミネココロニーでウミネコ *Larus carssirostris* を対象に実施したのが最初である。その後三浦は1991年と1992年にも実施し、特に1992年は春の渡り時期である5月1日から6日まで、オタドリ沼と仙法志地区で25種150羽を標識放鳥した。標識調査では、チョウセンウグイス *Horeites cantans borealis* が利尻島で初記録されたように(三浦1993)、渡りの解明はもちろんであるが、観察されにくい種の確認が比較的容易であること、繁殖の確認ができることなど、より正確な鳥類相の調査をすることができる。このようなことから筆者は、本島においてこれまでの観察と標識調査を継続的に行なうことにした。1993年は今後の調査計画を立てるための事前調査を兼ねて、杓形森林公園で同年4月から11月まで実施したので、その結果を予備的に報告する。

調査地及び調査期間

調査地は利尻島西部の杓形地区にある森林公園内(45° 10' N, 141° 9' E, 標高30-50 m)の森林である(Fig. 1)。環境はトドマツを中心にエゾマツが点在する針葉樹林であるが、イタヤカエデ、ヤチダモ、キハダ、ナナカマド、シウリザク

ラなどの広葉樹が小数混じっている。また、一部疎林やチシマザサの藪があるなど、環境は多様である。

捕獲のためのカスミ網は、公園内南側にある利用の少ない地区の樹林内と小高い丘の遊歩道を利用して2ヶ所に設置した。網は36メッシュ12 mを4枚と36メッシュ6 mを1枚使用した。

期間は1993年4月17日から6月3日までの36日間と8月29日から11月28日までの63日間のあわせて99日間である。時間帯は、季節によって違いはあるが、概ね平日は午前4時から7時半と午後5時半から7時、休日は午前4時から午後7時までである。なお、この調査ではテープレコーダーで鳴き声を流すなどの誘引はしなかった。

結果及び考察

1. 種数及び放鳥数

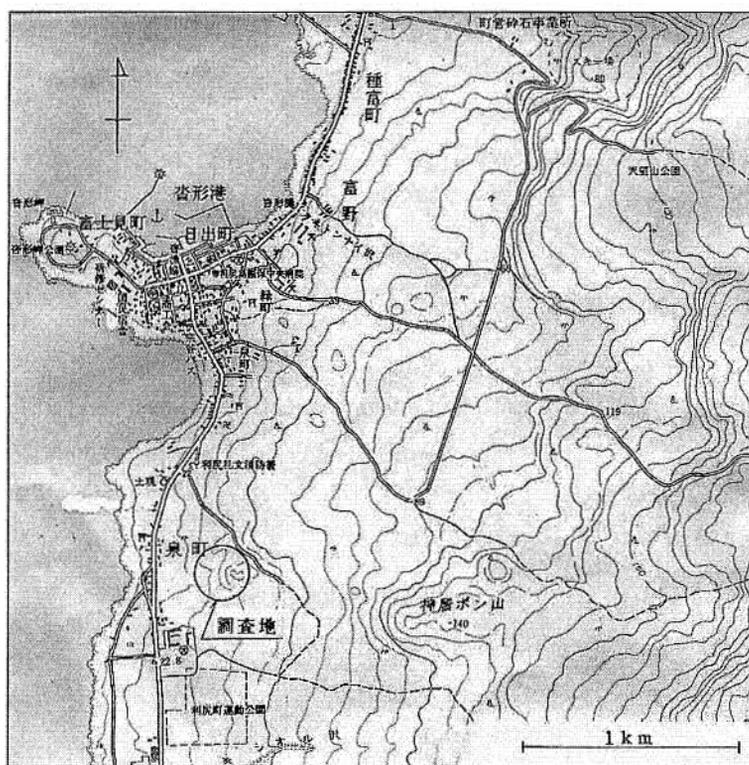
本調査では36種497羽を新放鳥し、14種80羽を再放鳥した(Tab. 1)。

2. 春(4月から6月)の特徴

春は新放鳥が31種269羽、再放鳥が13種42羽で、移動習性では夏鳥15種(48%)、旅鳥9種(29%)、留鳥7種(23%)であった。渡りの特徴を示すものとして、1日当たりの種数、新放鳥数が4月28日~5月2日に最大となった。この期間が本島に

図 1. 調査地

Fig. 1. Map of the study area.



おける春の渡りのピークであったと考えられる。観察でも 4 月 28 日にツグミ、シロハラ、ルリビタキ、カシラダカの大きな群れが本島に渡った。ただし、これら以外のジョウビタキ、ミヤマホオジロでは 4 月 11 日に初認が観察されていることと、ミヤマホオジロでは調査開始日の 4 月 17 日に 7 羽を放鳥したので、これらの種のピークはもう少し早いと考えられる。

それより遅れて 4 月 30 日にウグイス、クロジ、5 月 1 日にアリスイ、ビンズイを放鳥したことから、主な夏鳥の渡来は 4 月 30 日以降であったと推測される。5 月 10 日以降になると、旅鳥は放鳥されなくなり、夏鳥とそれらの再放鳥となって放鳥数は激減した。

3. 秋（8 月～11 月）の特徴

秋は新放鳥が 24 種 228 羽、再放鳥が 7 種 38 羽で、移動習性では夏鳥 11 種（46%）、旅鳥 5 種（21%）、留鳥 8 種（33%）と全体的な構成は変わらないが、夏鳥、旅鳥がそれぞれ減った。調査期間が長かったにもかかわらず、新放鳥数も同様に減り、春のようなピークが見られなかったことは、本島における渡りは概して春の方が大規模であることが推測される。

秋の放鳥の中心はカラ類であったが、これはカラ類が混群を形成していたことによるものである。

混群はヒガラを主にキクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラによって構成され、これら全体で秋における新放鳥の 59% にもなった。また、混群は再放鳥個体により一定した混群ではなく、不規則に入れ替わっているのではないかと思われた。

11 月 5 日以降になると、留鳥の放鳥とそれらの再放鳥だけとなったが、11 月 28 日の最終日は前日からの大雪にもかかわらず、ノゴマ (female) 1 羽を新放鳥した。ノゴマは繁殖地を 9 月下旬には去るとされており（山階 1941）、本調査でも 9 月 5 日以降は放鳥しなかったため、きわめて遅い記録である。

4. 主な放鳥種

放鳥数が最も多かった種はヒガラで、新放鳥全体の 29% を占め、特に秋では 43% を占めており、再放鳥もそれに比例して多かった。これは、調査地の環境によるものである。次に多かったのはルリビタキとシロハラで、2 種とも大部分は春の放鳥である。この 2 種で春の新放鳥数の 35% を占め、期間も春の渡りのピークと同様の 4 月 24 日～5 月 7 日であった。

夏鳥の中では、コマドリとウグイス、アオジが多く、アオジ以外の 2 種は秋に集中していた。コマドリは、秋の調査初日の 8 月 29 日から 10 月 9 日

表 1. 利尻島沓形森林公園における標識放鳥数. () は再放鳥数

Table 1. The number of captured birds in Kutsugata forest park, Rishiri Island.
The number of recaptures are given by parentheses.

和名 Japanese name	学名 Scientific name	放鳥数 No. of captured Apr.-June	Aug.-Nov.	計 Total
アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	7(2)		7(2)
アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	5(2)	1	6(2)
ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	7	1	8
ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	3(1)	10(1)	13(2)
コマドリ	<i>Erithacus akahige</i>	5	21(3)	26(3)
ノゴマ	<i>E. calliope</i>	7(1)	2	9(1)
ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	55(11)	4	59(11)
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>	1		1
ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	1		1
トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	3		3
クロツグミ	<i>T. cardis</i>	1		1
アカハラ	<i>T. chrysolaus</i>		2	2
シロハラ	<i>T. pallidus</i>	39(5)	1	40(5)
マミチャジナイ	<i>T. obscurus</i>		1	1
ツグミ	<i>T. naumanni</i>	6	2	8
ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>		1	1
ウグイス	<i>C. diphone</i>	4(1)	21(1)	25(2)
メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	1	6	7
キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	3	10	13
オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	2		2
エゾビタキ	<i>Muscicapa griseiticta</i>	2		2
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>		5	5
ハシブトガラ	<i>Parus palustris</i>	5(1)	7(3)	12(4)
ヒガラ	<i>P. ater</i>	48(5)	98(27)	146(32)
シジュウカラ	<i>P. major</i>	7	12	19
ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	5(6)	2(2)	7(8)
カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	9		9
ミヤマホオジロ	<i>E. elegans</i>	9(1)	6	15(1)
アオジ	<i>E. spodocephala</i>	17(5)	6(1)	23(6)
クロジ	<i>E. variabilis</i>	4	3	7
アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	3		3
カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	4		4
マヒワ	<i>C. spinus</i>	1		1
ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	4(1)	2	6(1)
ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>		4	4
カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	1		1
Total number of species		31	24	36
Total number of captured (recaptured) birds		269(42)	228(38)	497(80)

までに21羽を新放鳥したが、前半は幼羽の若鳥が大部分を占めていた。利尻島のコマドリは、黒田によって亜種リシリコマドリ *Erithacus akahige rishiriensis* とされており (Kuroda 1965)、今後の回収記録とともに、基礎的なデータなどを収集したい種である。ウグイスも秋の放鳥は若鳥が多く、10月中旬が放鳥のピークとなり最終放鳥は11月4日であった。

この他、秋だけにウソを4羽放鳥した。このうち11月13日に放鳥した1羽はアカウソ *Pyrrhula pyrrhula rosacea* (male) であった。

全体的には、森林性の鳥類が主に放鳥された。草原性の種はノビタキやベニマシコなど少数であり、シマセンニュウでは、春の渡来時期が遅いこともあって捕獲されなかった。また、ツグミは春、秋どちらも調査地で多数観察されたが、放鳥数は少なかった。これは、網場が樹林の中であったため、開けた環境を好む習性の本種が捕獲されにくかっただけであろう。したがって、今後は多様な環境で網を設置し、調査期間も拡大する必要がある。

5. 再放鳥

再放鳥ではゴジュウカラの Return (同一場所で約6か月経過後に捕獲されたもの) が1例あったが、状況からみてこれを含む再放鳥の80例全ては Repeat (同一場所で約6か月未満に再び捕獲されたもの) と解釈すべきであり、Recovery (放鳥地から5 km以上離れた地点で捕獲されたもの) は1例もなかった。

6. 調査期間中に観察された鳥

調査期間中に放鳥はできなかったが、調査地ではヤマシギ *Scolopax rusticola*、オオジシギ *Gallinago hardwickii*、キジバト *Streptopelia orientalis*、カッコウ *Cuculus canorus*、ツツドリ *Cuculus saturatus*、クマゲラ *Dryocopus martius*、キセキレイ *Motacilla cinerea*、モズ *Lanius bucephalus*、エゾセンニュウ *Locustella fasciolata*、センダイムシクイ *Phylloscopus occipitalis*、キビタキ *Ficedula marcissina*、サメビタキ *Muscicapa sibirica*、ニュウナイスズメ *Passer rutilans*、ハシボソガラス *Corvus corone*、ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* の16種が観察された。

おわりに

沓形森林公園は近年、町民のレクリエーション施設としてバンガロー、管理道、人口池、植樹などの整備が行なわれており、マツ類の立ち枯れも目立つなど、環境の変化が激しい地域である。本調査地である南側は現在のところ、遊歩道のみでの整備であり、公園のもつアメニティーとは違った森林の持つ豊かさが体験出来る貴重な地域でもある。調査結果からも、町の鳥でもあるコマドリが多く生息しているなど、この環境を今後も保全しなければならない責務を痛感した。

引用文献

- Kuroda, N., 1965. A new race of the Japanese Robin, *Erithacus akahige*, from Rishiri I., Hokkaido. Miscellaneous Reports of the Yamashina's Institute for Ornithology and zoology 4:221-223.
- 三浦二郎, 1993. 利尻島におけるチョウセンウグイスの Banding について. 利尻町立博物館年報, (7):43-54.
- 山階芳麿, 1941. 日本の鳥類と其の生態, 第二巻.